

第63回日本循環器学会

山口 淳一*

第63回日本循環器学会総会・学術集会は筑波記念病院院長・杉下靖郎会長のもと、平成11年3月27日から29日にわたって、東京国際フォーラムで開催された。本会は循環器領域の中では国内最大の学会であり、今回は、会長講演、記念講演2題、特別講演7題、一般演題2171題（口論1340題、ポスター831題）のほか、プレナリセッション3題、パネルディスカッション3題、コントロールセッション3題、トピックス2題、キーノートレクチャー12題、国際セッション14題、教育セッション3題に加え、サテライトセミナーとして、ランチョンセミナー24題、ファイアサイドセミナー10題と多数の発表が行われた。

学術集会はポスター展示場を含め合計18会場で開催されたため、残念ながらその一部にしか参加することができなかったのも、とくに印象に残ったものに絞って述べることにする。

今回は臓器移植法成立後、初めての脳死心臓移植が行われた直後に学会が開催されたこともあり、心臓移植はもとより、心臓移植を考慮しなければならぬような難治性心不全に対する治療戦略にも注目が集まった感がある。

心臓移植に関しては、第一日目のパネルディスカッションI “新しい心疾患外科療法とその適応”の中で、大阪大学の福嶋教偉氏から、術後の患者経過が良好であることが報告されるとともに、ドナー発生から実際に手術に至るまでのいくつかの問題点、今後の心臓移植の方向とその可能性についてもコメントがなされた。

内科的薬物治療に関しては、第一日目のシンポジウム“心筋の適応・破綻における神経体液性因子の新しい展開”の中で、不全心筋保護のために、

レニン-アンギオテンシン系のみならず、エンドセリン、利尿ペプチド、種々のサイトカインなど、活性化している神経体液因子を抑制するという新たなコンセプトに関して、基礎研究からのいくつかの報告がなされた。また、第二日目に行われた教育セッションII “重症心不全の新しい治療法”には、会場があふれる程の聴衆が集まり、難治性心不全に対する治療戦略に対する関心の高さがうかがわれた。この中では、急性期治療におけるPDEⅢ阻害薬、hANPの位置づけおよび使用法が症例とともに呈示されると同時に、PCPS、IABPといった非薬物療法の位置づけについても発表された。また、慢性重症心不全患者に対する治療の中では、 β 遮断薬による比較的良好な治療成績の報告とともに、末期心不全患者に対する外科的治療としてのBatista手術が取り上げられたが、日本における成績は未だ良好とはいえないのが現状であるという印象うけ、その適応においては慎重を要すると考えられた。

第二日目には、UCLAのDr. Harold JC Swanにより、美甘記念講演“Randomized Clinical Trials in Cardiovascular Medicine -Significance and Limitations”が行われ、近年の“Evidence-Based Medicine”という概念の裏付けとなっているいくつかのRandomized Clinical Trial (RCT)が取り上げられた。この中では、RCTの解析結果は確かに同じような母集団に対しては有用であるといえるが、同時に限界もあることが指摘された。すなわち、RCTは非常に費用がかかるために、医療関連企業が開発して有用と予想されるものに関して企業体と共同で行われることが多いということ、対象となる母集団が限定されている場合が多いということ、個々の症例についての検討が十分に行われないこと、限られた集団で証明されたことが、す

*東京女子医大附属日本心臓血圧研究所循環器内科

すべての集団で適応できるのかについての言及がほとんどされていないことなど挙げられた。これらのことは、臨床の場で欧米の大規模臨床試験を適応しようとする際には常に意識しなければならぬと同時に、日本における“Evidence-Based Medicine”を確立していく上でも重要なことと思われた。

虚血性心疾患の分野においては、第二日目のコントロールヴァーシI”虚血性心疾患治療：薬物療法か非薬物療法か”において、順天堂大学の山口洋氏、社会保険小倉記念病院の延吉正清氏が、それぞれの立場から発表を行った。一次、二次予防からみた薬物療法の有用性、患者のQOLからみたインターベンションの有用性、長期予後などに関して議論が交わされたが、治療の選択について一定の方向づけをするのはやはり困難であることが感じられた。インターベンションの分野では、千葉西総合病院の三角和雄氏がRotablator に関してのキーノートレクチャーを行い、従来のPTCAでは処理し難い高度石灰化病変、stent内再狭窄病変などに対しても、第二世代のstentを併用す

るいわゆるRotastentにより、その再狭窄率の改善が期待されることと同時に、治療の適応に関しては術者の技術習練と、高い医療コストも考慮した適応症例の選択が必要であるとの提言もなされた。また、急性冠症候群、急性心筋梗塞症と血管新生因子であるVEGF、HGF、bFGFとの関連についての発表や、炎症、ウイルス感染との関連についての発表が例年になく多くみられたが、その臨床的意義についてはまだまだ解明の余地があると感じられた。

以上、今回の第63回日本循環器学会総会・学術集会のごく一部について印象を述べた。循環器領域では日本最大の学会であり、いつものことながら日本にはこんなにも多くの循環器専門医がいるのかと感じるとともに、各会場における活発な討論、新しい発想と新しい試みの発表には刺激となるものがあつた。

21世紀に向かって、循環器領域における医療のますますの発展を期待させるに十分な熱気に満ちた学会であつた。